

土木学会選奨土木遺産 日谷山の石塁

土木学会選奨土木遺産
門信徒の奉仕で築かれた

につこくざん せきるい

広島県広島市佐伯区

広島市佐伯区湯来町内を流れる水内川は甘日市市吉和境を源に北東に向かって流れ、栗が瀬で太田川に合流し、瀬戸内海へ注ぎ込んでいます。水内川北西側の各谷川が深い谷になっているのは風化しやすい花崗岩が多くみられるからです。

湯来町多田に土石流危険渓流に指定されている日入谷川があります。地元では「蛇ノ谷川」と呼ばれる名が表すように、水内川との合流地域は崩壊土砂流出危険地区になっています。

善福寺は慶長16年（1611）、創建以来の地を離れ、日入谷川沿いの現在地に移り、浄土真宗の寺院になりました。その後、明和9年（1772）の火災で堂宇や宝物などはほとんど焼失しましたが、本尊は門徒によって救出され、翌々年再建されました。その後、寺域を守るため石塁が門信徒の奉仕によって築かれました。山林と元屋敷・耕地との境界にある長さ120mの石塁は、土砂災害だけでなく、寺域内に耕作地があったことから猪垣として獣害から守るために、築造されたようです。

現在の本堂は、明治45年（1912）に元々の大きさと再建され、山門や経蔵、鐘楼も大正から昭和初期にかけて建立されましたが、第二次世界大戦後は、石塁内側の屋敷跡や耕地が荒廃して山林と化したため、石塁の存在は忘れ去られていました。しかし、平成元年、荒廃していた本堂裏手の寺域を手づくりの自然公園「極楽苑」として整備するや、石塁が姿を現しました。そして平成16年に湯来町の文化財に指定され、石塁の補修が行われると、その外側に遊歩道も整備されました。かつて、安芸門徒の奉仕によって築かれた石塁は、現在地域住民によって積極的な保存・活用が行われており、今なお建設当時の心根が伝えられている貴重な土木遺産といえます。

湯来の民話「日入谷の大岩」

日入谷に直径4メートルの大きな岩があります。むかし、大水害があり、西の蛇の谷から流れてきたもので、その時、水内川を横切り向かい側の弥平谷までころがりました。

ところが、その洪水の水が引くと、この大きな岩に、西の谷の宮崎谷の宮の御幣と、東の谷の豆桁の宮の御幣が引っかかっていたようで、お宮をたてて祀ったそうです。

■位置図



善福寺から裏山に続く石塁



「日入谷の大岩」とされている岩



幅1m、高さ約2mの石塁が裏山の方から蛇ノ谷川沿いの石塁とつながっている。



善福寺の裏山から流れ下る日入谷川。溪流の向こうに日谷山の石塁が見える。